

2023. 5. 7. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書20章27～40節
『 生きることの保証 』

「復活についての問答」という小標題が掲げられています。

もともとこの復活という事柄、つまり「神によって生きる」という思想は何時・何処で・どのように誕生したのかと考えます。おそらく、このことはイスラエルという共同体社会の母体ともいべき共通体験に遡ります。この共通体験を出エジプトといえます。出エジプト記によれば、産まれる男子は皆殺しにされるなどの苦しみを経て、やがて民族は根絶やしにされるだろうという危機に瀕していたイスラエルを神は救ったという話です。この死すべき者を救うことと切り離して復活を説明することはできないのです。したがって、神とは、死んだ者の神ではなく、生きている者の神、すなわち人を生かされる神であるということなのです。

さて、ルカはマルコ12:18-27を参考にしながら復活の思想をより深めようと筆を執っています。当時はすでに滅んでしまっていたサドカイ派をあえて登場させています。いつもはファリサイ派や律法学者が登場するのですが、彼らは復活を信じていた(キリスト教の復活とは随分異なる)ので問答が成立しません。ですから、ここだけは復活を否定するサドカイ派が必要になったということなのです。彼らの問い(28-33)は稚拙なものでした。それゆえ同質の問いが初代教会内部にもくすぶっていたのかもしれませんが。ルカは外部に対して答える形をとりつつ実際には初代教会内部に対して語りかけてゆくのです。

34節以下でルカは、復活においては天使のようになるという思想を深めて「復活にあずかる者として、神の子だからである」(36)と宣言します。直訳すれば「復活の子なので神の子なのだ」とオリジナルな解釈をします。これは結婚とは子孫を設けるためにあるというサドカイ派の論理をくつがえします。さらに、ユダヤ教の復活とは、文字通り現世の命の復活だと考えたのですが、これも「めとることも、とつぐこともしない」(35)という言葉によってくつがえしてゆきます。そして、37節以下の「モーセの柴の箇所」(出エジプト3:1以下)を引用してアブラハム等の父祖を登場させます。そこで、神は彼らの生きている間は地上

で彼らを守り、死んだ今も彼らを守り続けられている。このことは死者を過去に捨て置くという理解ではなく、神の約束によって復活することが保証された死に方に過ぎないというのです。

わたしたちは人生の中で、自分の立つその所が突如としてくつがえされてゆくような出会いがあることを知っています。別に法に触れるわけでも、良心もとがめることもないのに、それだけで良しとは言わせない出会いです。そういう出会いを知らない人なら問題にしないようなことが、そこでは問題になります。人が人になれないような、そういう出会いがあるのです。

わたしたちは自分に益となるものを出会いと呼んで大切にしていまいがちですが、人はそれだけでは迷子になってしまうのです。人はどこかでくつがえされねばなりません。

イエスはサドカイ派の問いに真摯に答えます。「すべての人は、神によって生きているからである」と。死者の行く末を辿る人間理解が、ここで鮮やかに生きている、否、生かされている場へとくつがえされてゆくのです。